漫画KANAKURI

松本 敦（文化生活部）

毎週土曜朝刊に連載中の漫画「KANAKURI―日本初の五輪選手 金栗四三物語」が面白い。

担当者故の自画自賛ではない。タイトル通り、和水町出身で日本陸上界の発展にも力を尽くした四三の生涯を描いた作品だが、構成の橋本博・熊本マンガミュージアムプロジェクト代表、作画の岩田紘典・崇城大非常勤講師をはじめとするスタッフが、こだわり抜いたストーリーから目が離せない。

史実に沿いつつ、「面白くなければ漫画じゃない」が当初からのコンセプト。制作には崇城大芸術学部デザイン学科で学ぶ学生たちも加わり、ストーリー作りに頭をひねる。スポ根から恋愛、ギャグとあらゆる要素を詰め込んだ奇想天外な展開は、こちらの想像を大きく上回り、面白いこと間違いなしだ。

学生と岩田さんが協力して描く、絵にも注目してほしい。スラリとした美男美女が登場する中で、子ども時代の四三はなぜか三頭身。ぐりぐりの坊主頭がかわいらしい。8人きょうだいの7番目だった四三を、甘えん坊で憎めないキャラとして描き出し、風俗、文化など細部の描写にもこだわる。

取材前線

「当時の欧州の服装は」「スタジアムの様子は」―。四三が初出場したストックホルム五輪（1912年）を描くにあたり、岩田さんは文献やモノクロ写真をたどりながら想像力も働かせた。きっちり調べた事実を基にした漫画は、真実と同等以上の迫力を伝えているはずだ。

現在、ストーリーは四三の少年期を描く玉名編が佳境に入っている。四三に走るきっかけを与えたマドンナへの淡い恋心の行方、代名詞とも言える足袋との出合い、強靱（きょうじん）な走りを支える呼吸法を編みだしてから身に付けるまで―読みたくなるエピソードが満載だ。

2018・7・27